



REMATEC
Innovation for the Earth



R e J a p a n



2011.3.11 14:46

三陸沖を震源としたマグニチュード9.0の地震が発生。巨大な津波は、東日本沿岸の町を一瞬にしてのみこんだ。



岩手県随一の港町、大船渡市も壊滅的な被害を受けた。

岩手県は岩手・青森県境の不法投棄現場回復事業を手がけるなど、リマテックにとって親交の深い土地だ。

大船渡市には主要顧客であり、同事業のパートナーでもある太平洋セメントの大船渡工場があった。



津波にのまれ、がれきと化した車や家屋。

報道を通じて、その痛ましい光景を目の当たりにした副社長の田中は、
阪神淡路大震災での苦い経験を思い出した。

未曾有の被害に戸惑う現場。

遅々として進まないがれき処理。

遅れる復興。

当時、神戸でがれき処理にあたった田中は、

処理計画の策定スピードが、その後の復興を大きく左右することを学んだのだった。

2011.3.16

阪神淡路大震災を知る自分たちが動かなければ、また同じ轍を踏むことになる—

田中らは取るものも取りあえず車に乗り込み、大阪から秋田を経由して岩手に入った。

そして、太平洋セメントを通じて縁のあった大船渡市の自治体担当者らと

震災がれきの処理計画について協議を重ねた。



2011.3~4

協議の結果、太平洋セメント大船渡工場の協力を得て、
大船渡市の震災がれきを処理することが決まった。

津波で押し流された大量の土砂はセメント原料に。

木材くずや廃プラスチック、廃タイヤなどは燃料に。

セメント工場の力を借りれば、焼却プラントを新たに建設せずに済む上、

がれきを資源やエネルギーとして再生することができる。

今回の震災で壊滅的な被害を受けた同市にとって、

大船渡工場の存在は早期復興に向けてのかすかな光でもあった。

行政との交渉やリサイクルフローの確立は、

廃棄物のコンサルティング事業を手がけるリマテックの得意とするところだ。

しかし、この計画を実現するためには、さらに解決しなければならないことがあった。

地元企業とどう協業し、地域雇用をどう創出するか—

岩手から750kmも離れた大阪に本社を置くりマテックにとって、

それは悩ましい問題だった。

かねてから親交が深い地域とは言え、よそ者であることには違いない。

地元企業が中心となつてがれきの処理を行い、

復興に向けて前進するためには、まず地元と信頼関係を築く必要があった。

そこでリマテックは4月20日、盛岡市に東北支社を登記し、

次世代の幹部候補として期待を寄せる中核社員を現地へ送り込むことを決めた。

それは本拠地大阪の大幅な戦力ダウンを意味していた。

しかし、地元と一体となりプロジェクトを推進していくためには、

そうするより他に選択肢はなかった。





2011.5

プロジェクトの命運を託された3名の社員が現地入りをした。大船渡事業所で所長を務める紺谷も、その一人だ。

がれきの選別から処分先の確保、環境測量まで、大船渡市に代わってあらゆる業務を請け負うことになっている大船渡事業所では、行政との折衝に長けたリーダーが求められていた。大阪本社の営業所属長として数々の交渉ごとをまとめ上げてきた紺谷に白羽の矢が立ったのは、そのためである。

紺谷に与えられたミッションは、大船渡市のために震災発生から3年の間に大船渡市のがれきを100%処理すること。震災発生直後から他の自治体に先駆けてがれき処理に取り組んできた同市ではあったが、それでもスケジュールはぎりぎり。まずは一刻も早く地元の建設会社と信頼関係を築き、倒壊家屋の解体・撤去、解体後の破碎・分別作業を進める必要があった。



副社長の命を受けて紺谷と共に現地入りした寺西は、赴任早々、陸前高田市のがれき処理の責任者を任されることになった。

大船渡市と隣接する陸前高田市は、市街地の大半が壊滅的な被害を受けた。その被害は被災地の中でも群を抜いており、がれきの量は大船渡市の75万7000トンに対して、その2倍となる166万トンにのぼった。また、同市の長部漁港では水産加工業者から流れ出した水産廃棄物ががれき類と同様に大きな問題になっていた。

寺西に与えられたミッションは、それら環境衛生の悪化を招いている水産廃棄物を一刻も早く処理すること。強烈な腐敗臭と、大量発生する害虫。リマテック堺SC工場でチーフマネージャを務めるなど現場経験が豊富で毒物や劇物の扱いに慣れる寺西にとっても、それは過酷な任務であった。

震災がれき量／岩手・宮城・福島……2590万トン
岩手県大船渡市……75万7000トン
岩手県陸前高田市……166万トン



紺谷が行政交渉のスペシャリスト、寺西が現場指揮のスペシャリストであるなら、北崎は研究開発のスペシャリストだ。

がれきの最終処理を行う太平洋セメント大船渡工場では、津波をかぶったがれきに含まれる塩分が大きな問題になっていた。塩分濃度が高いとセメント品質の低下やプラントの故障につながるからである。北崎はこの問題を解決するために、震災発生直後から堺SC工場の技術本部で除塩技術の研究を進めていた。

北崎のミッションは、太平洋セメント大船渡工場の構内に除塩プラントを建設すること。ラボレベルでの研究では、すでに一定の成果を取ってはいたが、それをプラントへと展開するには時期尚早だった。北崎は不安な気持ちを抱えつつ、大阪を後にした。



2011.7

リマテックの従業員は3月16日に岩手に入って以来、盛岡市内のホテルに滞在し、そこを拠点に活動を続けていた。

盛岡から大船渡・陸前高田へは、車で片道2時間半もかかる。紺谷らは午前7時から作業を始めるために、毎朝5時前にホテルを出た。現場での作業を終えて、再びホテルへ戻ってくるのは20時。そこからミーティングと残務をこなすと、時計の針はいつも0時を回っていた。

それでも彼らは泣き言をもらさなかった。「自分たちの手で、一日も早い復興を！」。がれき処理を通じて地元の人たちと触れ合ううちに、彼らの胸に熱い想いが芽生えはじめていた。

とは言え、連日の長距離移動と睡眠不足は確実に彼らの体を蝕んでいた。おまけに行政機能は依然として混乱状態にあり、自治体から支払われるはずの報酬も未だに受け取ることができていなかった。

疲弊する従業員。積み重なる赤字。彼らの想いとは裏腹にプロジェクトは限界に近付いていた。



2011.8

太平洋セメント大船渡工場の構内に仮設住宅と食堂が完成。
長距離移動とコンビニ弁当の日々から解放されたことで、
従業員らの疲労は一気に軽減した。

また、国から自治体に対してようやく補助金が交付されたことで、
金銭面の問題も解消された。

限界の瀬戸際でプロジェクトは奇跡的に存続の危機を脱したのだった。



2011.6～12 大船渡市

地元企業や現地雇用の従業員から信頼を得るために紺谷は誰よりも働いた。労をいとわないその姿勢は、リマテックが金もうけのためだけに東北へやってきたわけではないことを雄弁に語っていた。

7月8日、大船渡市では他の自治体に先駆けて二次選別所がオープンした。一次選別所の確保さえままならない自治体が多い中で、同市の処理スピードは群を抜いていた。処理計画の策定が早かったことがその最たる要因ではあるが、わずか数週間で地元からの信頼を獲得し、協業体制を確立した紺谷の功績も大きかった。

一方、北崎は除塩プラントの開発を急いでいた。二次選別所がオープンして破碎・分別作業が進んだとしても、除塩ができなければセメント原料として再利用することはできない。大船渡工場でセメントの生産が再開される年末には、何としてでも除塩プラントを完成させなければならなかった。

北崎はパイロットプラントでの実証実験もそこそこに、8月よりプラント工事の準備に取り掛かった。そして12月、計7ライン（可燃物用6ライン、不燃物用1ライン）の除塩プラントが完成した。研究開始からわずか9ヶ月後のことだった。



2011.5～12 陸前高田市

page 23

さんま・しゃけ・いくら…。腐敗物の山を、太平洋セメント大船渡工場で焼却処理するために20kgずつ袋詰めしていく。凄惨をきわめる現場での作業に寺西たちは食欲を失っていった。しかし、作業を共にする漁港の人たちのことを考えると、弱音など吐いている場合ではなかった。

被災地でつらい思いをする人たちを元気づけるために来たのだー

寺西たちは辛い表情を微塵も見せず、いつも明るく振舞った。…つもりだったが、水産加工場のおばさんには、それが空元気であることなどお見通しだった。「食べてないでしょ」とおばさんからそっとパンを手渡され、寺西たちは逆に元気をもらった。復興という一つの目標に向かって共に汗を流すうちに、互いのあいだには目に見えない絆のようなものが芽生えはじめていた。

page 24

陸前高田市でも、がれき処理(仮置場の施工と管理、二次選別所の施工および破碎・選別処理)を請け負うことが決まったのは、その頃のことである。手の施しようなく腐敗して、環境衛生被害の最大原因となっている水産廃棄物9,700tを最優先に除去したことで、漁協・市民・行政の信頼を得、評価されたのだ。とは言え、大量に災害廃棄物が発生した陸前高田市では、仮置場・二次選別場の用地確保や整備にも苦労の連続。6月から整備でき次第、5つの仮置場を順次稼働させ、二次選別所がオープンする9月には、地元からの信頼もより厚くなっていた。



page 25

2011.3.11から2年 —



page 26





震災がれき処理状況／岩手・宮城・福島 58%
大船渡市 62.9%
陸前高田市 61.8%

災害廃棄物の仮置場への搬入状況／岩手・宮城・福島 91%
大船渡市 99%
陸前高田市 91%

津波堆積物処理状況／岩手・宮城・福島 32%
大船渡市 93%
陸前高田市 0%

※2013年3月31日現在(環境省発表)

震災発生から二年が経過した。焼却施設の不足。進まぬ広域処理。

被災地では多くの問題と向かい合いながらも、着実にがれき処理・堆積物処理を進めてきた。

紺谷・寺西・北崎らの活躍により、

大船渡・陸前高田の両市では、順調なペースで処理が進んでいる。

それでも被害の大きかった陸前高田市の状況は深刻だった。

陸に打ち上げられた84万トンにも上る大量の土砂にはがれきが混在している。

そして2013年4月。陸前高田に分級プラントが設立された。

これで急ピッチで津波堆積物の処理と再利用が進められる。

土砂由来の堆積物は農地の基盤土に、農地由来の堆積物は農地の表土に、再資源化されていく。

2014年3月末には完了させ、来春の作付に間に合わせる予定だ。

今や、大船渡市でのがれきの搬入処理はほぼ100%、

がれきの再生利用率は84%、津波堆積物の再生利用率は100%。

陸前高田市でも、がれき搬入処理は91%。

「リマテックで良かった」。

地元の人たちからの声を励みに、彼らは今日もがれきの山に挑む。



地元の人たちとバンザイできる日が来るまで、俺たちはここを離れない。
東北支店への異動を命じられたとき、不安がなかったかという嘘になる。
しかし、今ではこの場所で地元の人たちと働けることを誇りに思う。
俺たちは今、日本で一番大事な仕事をしているのだ。
がれき処理の最前線で活躍する彼らは、そう語る。

「がれきがなくなること」=「復興」ではない。
つまり、リマテックの仕事は、がれきを処理しても終わらないということ。
永続的に地域雇用を創出し、地域経済の活性化に貢献する。
大船渡市・陸前高田市の持続的発展を実現することが、この仕事のゴールだ。

日本を再生する。
それがリマテックに与えられた使命だ。